

Title	インクナブラの活字研究と書誌学者間の学術コミュニケーション
Author(s)	若松, 昭子
Citation	聖学院大学論叢,20(2) : 185-196
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=41
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

インクナブラの活字研究と書誌学者間の学術コミュニケーション

— ブレイズ, ブラッドショー, プロクターを中心に —

若松 昭子

Typographical Studies on Incunabula and
Scholarly Communication among Bibliographers

— Focus on Blades, Bradshaw and Proctor

Akiko WAKAMATSU

In the background of the birth and development of the new study called analytical bibliography, there was a close exchange of ideas among the people sharing interests in early printing in different countries, different fields and different occupations such as researchers, publishers, rare book suppliers, and librarians. The result of the physical and substantial study of books, especially printing types, not only tells the origins of books but also elucidates the history of typography in the latter half of 15th century Europe, which had been unarticulated until then.

Key words: インキュナブラ, 印刷術, 書誌学, 印刷史, 書物史

目次

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| はじめに | 3. プロクターによる大英博物館初期印刷本研究 |
| 1. ブレイズによるキャクストン研究 | おわりに |
| 2. ブラッドショーによる活字研究の体系化 | |

~~~~~

## はじめに

分析書誌学 (analytical bibliography) とは、書物を物理的に検討しそれを詳細に記述することであると定義されている。個々の書物の印刷された場所や年代を確定し、書物生産の背景まで理解することを重視している場合は、歴史書誌学または史的書誌学と呼ばれる<sup>1)</sup>。人々の知的遺産を有効

に活用するためには、知識の体系化を図るための書誌の存在が不可欠である。分析書誌学は、19世紀後半のヨーロッパにおいて、正確な書誌を作成するために、書物の物理的な側面、すなわち紙、活字、インク、装丁などを研究することによって、書物の印刷関連事項を明らかにするところから始まった。

19世紀後半のイギリス、特にロンドンを中心として発展した分析書誌学は、やがてアメリカに導入され、20世紀前半には英米両国における書誌学研究に大きな成果をもたらされた。分析書誌学の発展と共に、研究対象は次第にインクナブラから近現代の書物へと拡大された。現在では、英米以外の国々においても、書物の造本行程やテキストの編集行程に関する検討が行われるようになった。例えば、わが国における分析書誌学の近年の研究では、夏目漱石の原稿及びその初版本や改訂版等の比較を通して、漱石の意図を検証するという試みも発表されている<sup>2)</sup>。

グーテンベルクが印刷を開始した15世紀中頃から、印刷術がヨーロッパ各地に広がりを見せる15世紀末までの約50年間に印刷された書物は、インクナブラ (incunabula: インキュナブラ、インキュナビュラ) と呼ばれている。印刷術が開始された時期のインクナブラには印刷者、印刷地、印刷年月日の記述がないものが多く<sup>3)</sup>、個々の書物の印刷された場所や年代を確定することは困難であった。そのため、15世紀後半における印刷術の普及の過程も長い間不明のままであった。

19世紀末のイギリスとオランダにおいて、活字体や商標などの書物の物理的な部分を研究することによって、印刷術の伝播過程を明らかにしようとする書誌学上の試みが生まれた。ロンドンの印刷業者ブレイズ (William Blades, 1824- 90) は、イギリス最初の印刷業者であるキャクストン (William Caxton) が印刷した書物の中の様々な活字体の変化を研究し、キャクストン本の印刷年代を明らかにした<sup>4)</sup>。また、オランダのハーグ王立図書館長ホルトロップ (Johannes W. Holtlop, 1806- 1870) も同様の方法により、オランダ低地地方のインクナブラ目録を編年順に編纂した。

彼等の研究に積極的な助言を行っていたのは、ケンブリッジ大学図書館のブラッドショー (Henry Bradshaw, 1831- 86) であった。彼は、19世紀後半に行われ始めた、書物形態を対象とした物理的な研究を体系化しようと試みた。それは、現存するインクナブラのすべてをこうした科学的な方法で調査し、その印刷地、印刷者、印刷年代を明らかにする、またそれによってこれまで不明であった印刷術の伝播と普及のプロセスも明らかにしようとするものであった。

この壮大な計画を実現したのが、大英博物館図書館員のプロクター (Robert G. C. Proctor, 1868- 1903) であった。彼は、大英博物館とオックスフォード大学ボドレイ図書館が所有していたインクナブラを対象に、それぞれの活字形態を丹念に調査分析し、それらの印刷者、印刷地、印刷年代を判別した。この結果をもとに、プロクターは大英博物館のインクナブラを印刷国、印刷地、印刷者ごとに分類し印刷年代順に配列していった。こうしてヨーロッパにおける印刷術の伝播過程が地理的、歴史的に明らかにされていった。

本稿では、19世紀後半の分析書誌学の萌芽期において、インクナブラの活字研究で大きな貢献を

したブレイズ、ブラッドショー、プロクターを中心に、書誌学者たちの活字研究とその発展の様子を、彼らの学術的な交流を背景として辿る。

## 1. ブレイズによるキャクストン研究

ブレイズはロンドンの印刷業者であった。ロンドン郊外の印刷業者の息子として生まれた彼は、16歳より父親の会社で印刷業に従事し、やがて兄弟と共にブレイズ・イースト・アンド・ブレイズという出版会社の経営を始めた。ブレイズは、イギリスで最初の印刷業者であってまた最初の英語による印刷本を出したキャクストン (William Caxton) に関心を持った。ブレイズがいつごろからインクナブラに関心を抱いたのかは不明であるが、ブレイズ会社は1958年と1859年にキャクストンの印行による本をリプリントとして出版しており、それ以前にはすでに調査を開始していたと思われる。当時、キャクストンの伝記や書誌の出版は既になされていた。しかし、それまでの伝記は、キャクストン自身が出版物の中で述べている経歴や、根拠の薄い言い伝えなどをもとにしていたために、キャクストンの生涯や、イギリスへの印刷術の導入の時期などについて不確かな部分が多かった。

ブレイズは、一人の活字印刷業者としての立場からキャクストンの作品に関心を持ち、キャクストンに関する大規模で新しい伝記と、詳細な書誌を作ろうと考えた。彼は、1855年頃より、現存しているすべてのキャクストン本について、精密な調査を開始した。調査の過程では、ブラッドショーからしばしば有益な助言を受けた。ブレイズの目的は、活字に関する事項をできるだけ多く記述したキャクストン本の目録を作成することであった。そのため、彼は、ヨーロッパ各地の図書館や個人蔵書に分散した知りうる限りのキャクストン本をすべて精査し、それらの活字形態をリトグラフによるファクシミリにして一文字ずつ丹念に調べていった。

活字の形状、そしてその磨耗具合は、印刷された順番を推定するための重要な鍵であった。調査の対象となったキャクストン本はおよそ500部にもものぼったという<sup>5)</sup>。この結果、彼は、キャクストンが用いた活字を6種と2変種に分類し、印刷工房でのそれらの使用時期より各巻の出版年代を提示することができた。印刷活字の変化を記録するという試みは、これが初めてであった。ブレイズの研究成果は、*The Life and Typography of William Caxton* (London, J. Lilly, 1861-63) として出版された。

英語で印刷された最初の書物『トロイ歴史集成』(*The Recueyll of Historie of Troye*)に寄せたキャクストンの冒頭の言葉のなかには、彼の翻訳の開始と翻訳完成の時期が記されている。人々はそれをもとに、最初のキャクストン本は1471年にケルンで出版されたと考えていた。また同様、キャクストン自身が残した言葉を手がかりに、1474年の『チェスのゲーム』(*The Game of Chess*)がウェストミンスターで出版されたイギリス初の印刷本であると考えられていた。しかし、ブレイズは、キャクストン本に現れる赤インクの印刷と、別の印刷業者(コラル・マンシオン)がブルージュ

で行った赤インクの印刷に類似点があることを発見した。そして、キャクストンがイギリスのウェストミンスターで印刷所を開く以前に、彼がブルージュで印刷業を営んでいたと推測し、上記の2作品はいずれもブルージュで印刷されたものであると主張した。これを裏づける直接の証拠はまだないが、キャクストンがケルンから戻ってブルージュで1474年にこれを印刷したという仮説は、今も覆されていない。むしろこの仮説を補強する多くの状況証拠が今日提示されている<sup>6)</sup>。

こうして、印刷活字の分析を通して、キャクストン本の印刷年代が明確にされ、それらの編年順配列が可能になった。キャクストンの活字は現在では8種に分類されているが、これもブレイズの実証的な研究があってこそその結論であると評価されている<sup>7)</sup>。

ブレイズらの新しい実証的な研究によって、キャクストンを含むイギリスの初期印刷術への関心は高まっていった。1877年には、イギリスへの印刷術導入400年を記念する「キャクストン祝祭」展示会が開催された<sup>8)</sup>。数多くの図書館・団体・個人がそれぞれ所有する書籍を出品し、計81作品151部のキャクストン本と、その他多くのイギリス初期印刷本が展示されることとなった。ブレイズは、この大展示会の指導者かつ主催者となり、企画・運営を引き受け、自らも数多くの書籍や関連品を出品した。

同じ1877年には、英国図書館協会 (The Library Association) が設立された。ブレイズは、ブラッドショーらとともにこの設立にも尽力し、後には会のために数度の講演も行っている。また、ブレイズは、後年、書物に関するエッセイ『書物の敵』(*The Enemies of Books*)<sup>9)</sup>をあらわした。これは、キャクストン本の調査研究のために数多くの図書館を訪問した際のブレイズ自身の経験も交え、火や水、紙魚や埃、さらには書物への無関心など、書物を破壊する敵についての様々なエピソードをまとめたもので、当時のベストセラーとなった。このなかには、各地の書籍商との交流や、大英博物館印刷本部長のガーネット (Richard Garnett, 1835-1906) や同館印刷本元部長のライ (William Brenchly Rye, 1818-1901)、オックスフォード大学ボドレイ図書館長バンディネル (Bulkely Bandinel, 1781-1861) らとの交流の様子も生き生きと描かれている。例えば、次のような記述である。「1858年、初めてボドレイ図書館を訪れたときのことは今でもよく覚えている。当時は、バンディネル博士が館長を務めていた。私はその素晴らしいキャクストン印刷本コレクションを調査しに行ったのだが、博士は親切にもあらゆる便宜を図ってくださった。」<sup>10)</sup>

ブレイズは、書誌学の研究を発展させる上でもう一つの大きな貢献をした。それは、彼の残した膨大な図書資料が基礎となり、印刷研究の専門図書館であるセントブライド図書館が設立されたことである<sup>11)</sup>。19世紀末のロンドン西部地区は出版業が盛んであり、その中心地フリート街 (Fleet St.) にはセントブライド教会があった。1889年、印刷や出版に関する教育講座を提供するためにセントブライド財団が設立された。設立の資金は、セントブライド教区の人々の寄付によるものであった。ベリー (W. Turner Berry) は、その理由に、教会が既に12世紀に建設されており、15世紀後半にド・ウォード (Wynkyn de Worde) やピンソン (Richard Pynson) 等の初期印刷業者がフリー

ト街に印刷所を開業して以来、セントブライド教会と印刷業者達との間には友好的関係が続いていたことをあげている<sup>12)</sup>。

セントブライド財団が設立された一年後、分析書誌学の先駆者の一人であるブレイズが亡くなった。印刷学校の設立を準備していた財団は、ブレイズが活字研究のために収集した個人蔵書を購入し、これを印刷学校の中心に据えることを計画した。そして、ブレイズの収集した約2,000点の蔵書とパンフレット類を、相場の5分の1ほどの低価格（975ポンド）で譲り受けた<sup>13)</sup>。このなかには、印刷史に関する彼の著作や雑誌記事、未発表の原稿なども含まれていた。4年後の1895年、財団は教会の隣接地に印刷専門学校セントブライド財団インスティテュート（St Bride Foundation Institute）を開校し、同時に、ブレイズのコレクションを基礎として学校附属のセントブライド図書館（St Bride Library）<sup>14)</sup>を設立した。これが、現在のセントブライド印刷図書館（1952年に名称変更）の始まりである。

## 2. ブラッドショーによる活字研究の体系化

分析書誌学の創始者と見なされているのは、ケンブリッジ大学図書館長ブラッドショーである。ブラッドショーは、ロンドンの銀行員（家）の5番目の子として生まれた。ブラッドショーが14歳のとき彼の父親がなくなり、以後家族はつつましい生活を送る。彼は奨学金を得て、イートン校、そしてケンブリッジ大学キングズ・コレッジへと進み、優秀な成績を収め、卒業時には、キングズ・コレッジ賞を受賞している。卒業後まもなくして、ケンブリッジ大学図書館へ就職し（1856）、11年後には図書館長となった（1867）。

ケンブリッジ大学図書館の館員であったブラッドショーは、オランダのホルトロップ、イギリスのブレイズらの研究を体系化しようと試みた。当時、ハーグ王立図書館の館長であったホルトロップは、インクナブラの活字、木版、商標などの比較分析によって、印刷者や印刷地等が不明であったインクナブラを同定しようと、活字ファクシミリの一覧作成を試みた。ブラッドショーは、ホルトロップの研究を知って賛同し、早速手紙によって方法論などの考えを交換しあった。その成果は、ハーグ王立図書館所蔵のインクナブラ1,582点の目録 *Monuments Typographiques des Pays-Bas au Quinzième Siècle* (La Haye, Nijhoff, 1857-68) として刊行された。これは、低地地方（ベルギー、ルクセンブルク、オランダ）で印刷されたインクナブラを編年順に記述したものとなった。ホルトロップの研究により、インクナブラの物理的特徴の比較分析の可能性や重要性が明らかになった。

ブラッドショーは、ブレイズのキャクストン研究にも積極的なアドバイスを続けた。彼は、印刷術を各国で個別に研究するのではなく、もっと体系的で広範に研究すべきであると考えていた。ブレイズがキャクストンのイギリスでの活動だけではなく、大陸へと目を向け、結果としてブルージュでの印刷の可能性を発見したのも、ブラッドショーの影響が大きかったと思われる<sup>15)</sup>。

ブラッドショーがブレイズと初めて連絡を取ったのは、1857年のことらしい。ブラッドショーがケンブリッジ大学図書館に就職してから1年後のことである。二人のやりとりがもっとも密であったのは、1860年から61年とされているが、この時期はブレイズのキャクストン研究が実を結ぼうとしていた頃であった。次のような逸話もある。「1860年9月のある晴れた日、自分の本の初稿を持ったブレイズはキングズ・コレッジにブラッドショーを訪れた。早めの正餐の後にコレッジの庭へと場所をうつした二人はワインを一本頼むと、気持ちのよい夕べを校正刷りの読み聞かせと意見交換にあてたという。」<sup>16)</sup>

また、彼は、ブレイズの要請にこたえて、大学図書館の蔵書を調べ、あるいはその求めに応じて実地調査へ出かけた。キャクストン研究にあたっては、ブラッドショーの果たした役割は大きかった。

ブラッドショーはホルトロップやブレイズのインクナブラ研究を、さらに多くの地域、多くの印刷業者の作品にまで拡大しようと試み、ヨーロッパの主要5ヶ国、20都市で印刷されたインクナブラ86点を対象に活字分析を行った<sup>17)</sup>。オランダでもホルトロップの後任としてハーグ王立図書館長となったキャンベル (Marinus F. A. G. Campbell, 1819-90) が、低地地方におけるインクナブラの全国書誌 *Annales de la Typographie Néerlandaise au XV<sup>e</sup> siècle* (La Haye, Nijhoff, 1874) を編纂した。この書誌は、近年にいたるまで何度も繰り返して増補版が出版されている。

書物の研究に科学的方法を取り入れたブラッドショーの試みは、書誌学に新しい分野を開くターニングポイントとして評価されている<sup>18)</sup>。残念なのは、ブラッドショーはほとんど著作を残さず、本も出版しなかったことである。幸いにも、ブラッドショーが研究仲間との間に交わした大量の手紙やノート類が残っており、彼の死後に集められて刊行された<sup>19)</sup>。今日では、それらを通してブラッドショーの考えや助言の内容を知ることができる。ニーダム (Paul Needham) は、インクナブラの研究は現在に至っても、ブラッドショーの研究からそれほど大きく隔たっていないと評価している。そして、「もし、ブラッドショーが手紙やノートの内容を著作として出版していたならば、ブレイズのキャクストン研究を凌ぐものになったであろう」<sup>20)</sup> と述べ、ブラッドショーが書誌学発展へいかに貢献したかを示唆した。

ブラッドショーは1889年、ブレイズは1890年と相次いで世を去ったが、彼らの築いた実証的书誌学は、2年後に設立される英国書誌学会 (1982) に引き継がれ発展していった。

### 3. プロクターによる大英博物館初期印刷本研究

19世紀後半に盛んになった書物の科学的な研究は、特にイギリスにおいて発展した。インクナブラの活字研究を集大成したのは、大英博物館のプロクターである。彼は、ブラッドショーが行った活字分析の研究成果とホルトロップのインクナブラ目録の印刷史的配列法を基礎に、大英博物館が所蔵するインクナブラの再編成を目指して活字の研究を行った。

プロクターは、直接ブラッドショーに出会って意見の交換をしたことはなかった<sup>21)</sup>。1886年のブラッドショーの死去時点において、プロクターは未だ大学に進学前であった。

1886年、プロクターは奨学金を得て、オックスフォード大学コープス・クリスティ・コレッジに入学した。彼は、オックスフォード大学時代から既にインクナブラに関心を持って調査を行っていた。1889年には、書誌学者として既に名を知られていたマンチェスター大学ジョンライランズ図書館のE・ゴードン・ダフ (E. Gordon Duff, 1863-1924) に自ら手紙を書き、インクナブラの目録作成への関心を告げた。ダフは、キャクストンに関する研究や、初期印刷史や装丁に関する図書を既に出版していたが、インクナブラの体系化に共通の関心を持つ若者プロクターに刺激を受け、以後二人の交流は続けられていった。プロクターは、大英博物館に行く直前までオックスフォード大学ボドレイ図書館のインクナブラ目録編纂のために調査を続けたが、その間もダフからの助言を受けたと思われる<sup>22)</sup>。

プロクターは、大英博物館の図書館員になると (1893~1903)、活字体を基にインクナブラの歴史を明らかにしようとしたブラッドショーの試みを、ヨーロッパ全体のインクナブラに広げようとして、館が所蔵する約8,000点のインクナブラの活字を悉く調査した。その成果は、1985年から1897年にかけてまず、キャンベルの低地地方インクナブラ書誌の補足として、*Tracts of Early Printing*.<sup>23)</sup> が出版された。プロクターは、これはブラッドショーの仕事を完成するための拙い試みの一つであると、序文で述べている<sup>24)</sup>。次なる成果は、1898年から1899年にかけて、*An Index to the Early Printed Books in the British Museum; from the Invention of Printing to the Year 1500 with Notes of those in the Bodleian Library* (London, Kegan Paul, 1898-99) として出版された。(以下「プロクター索引」と呼ぶ。)

プロクターのこの研究によって、大英博物館のインクナブラは印刷史の観点から再編成された。つまり、プロクターはこの索引のなかで、大英博物館所蔵のインクナブラを印刷開始の早い国順にわけ、次に印刷開始の早い都市順、更に印刷開始の早い印刷者順、またその中を作品の刊行年順に分けて配列した。例えば、索引には、15世紀において、ロシアを除くヨーロッパで印刷が行われた13ヶ国が、印刷開始の早い順に示されている。それらの配列を辿ると、1454年にドイツで発明された印刷術が、1465年にはイタリアへ、1468年にはスイスへ、1470年にはフランスへと伝わり、以下順次、オランダ、ベルギー、オーストリア・ハンガリー、スペイン、イギリス、デンマーク、スウェーデン、ポルトガル、モンテネグロの諸国に広がっているのがわかる。

また、それぞれの国の中を見ると、印刷開始の早い都市の順に配列がなされており、各国内における印刷術の伝播経路がわかる仕組みになっている。例えば、印刷開始の最も早いドイツには、15世紀において印刷所が存在していた51の都市が示されている。プロクターは、それらの都市を印刷開始の早い順に配列することによって、印刷術がドイツ国内においてどのように普及していったのかを示した。すなわち、索引からは、グーテンベルクによってマインツで発明されたといわれる印

刷術が、1461年にストラスブルク（現在はフランスに属する）とバンベルクへ、1466年にはケルンへ、1467年にはエルツビル、1468年にはアウグスブルク、1470年にはニュルンベルクと順次広がっていき、1500年に51番目の都市であるプロッツハイムに伝播している様子を辿ることができる<sup>25)</sup>。

さらに、それぞれの都市の中を見ると、各都市の中の印刷所が印刷開始の早い順に配列されている。ドイツについて早い時期から印刷術が導入されたイタリアは、15世紀末には、印刷業の最も盛んな国となった。特にベネチアは、ローマン活字体を考案したニコラス・ジャンセン (Nicolas Jensen) や、イタリック活字体、ギリシャ活字体などを考案したアルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius) などが活躍した街として知られる。プロクターの索引には、ベネチアの151の印刷所が示されている。これは、プロクター索引中の一都市における印刷所の数としては最多数を示している。ここから、ベネチアはイタリアの中でも特に印刷が盛んな街であったことが窺える。索引からは、ベネチア最初の印刷所は、シュパイアー (Speier) 出身のヨハン (Johann) とヴェンデルリン (Wendelin) が開いた1469年の工房であったこと、ジャンセンは1470年に彼等に次いで2番目に印刷所を設けたこと、アルドゥスはかなり遅れて1494年から1495年頃に131番目の印刷所を開いていたことなどがわかる<sup>26)</sup>。大英博物館とボドレイ図書館のインクナブラは、これらの印刷所毎に分類され、さらにその出版年順に配列されていったのである。

このように、プロクターは、インクナブラに用いられている活字体の変化を調べることによって、インクナブラの歴史を明らかにしていった。つまり、彼の索引は、ロシアを除くヨーロッパ全域における印刷術の伝播の過程を、歴史的、地理的に示すことに初めて成功したとすることができる。今日、この分類方法はプロクター分類法、またはプロクター配列法として知られている。

続いて、プロクターは大英博物館所蔵インクナブラ目録（現在のBMC）の編纂に取りかかる。しかし、彼の突然の死によってこの目録編纂作業は、同僚のポラード (Alfred W. Pollard, 1859-1944) 等に継承され、*Catalogue of Books in the Fifteenth Century now in the British Museum*. (London, The British Museum, 1908-1985) として刊行された。これは、最初に出されたプロクター索引の骨格の上に、個々の作品のより詳細な記述や修正、また新たに発見された情報などを加えたものである。その後、研究が重ねられたことで補足される部分は多かったが、その主要な部分については、未だにプロクター索引の概要を覆すにいていないとストークスは述べる<sup>27)</sup>。

ブレイズのコレクションを基礎にして作られたセントブライド図書館は、プロクターの時代の書誌学者たちの研究交流の場ともなった。セントブライド図書館は、ドラモンド (Charles J. Drummond) やペディー (Robert A. Peddie, 1870-1951) が館長の時期に（ドラモンド：1895～1904；ペディー：1904～1916）、購入や寄贈により複数の貴重なコレクションが加えられて、蔵書は次第に増強された。この中には、印刷活字に関するコレクション (Reed Collection) や印刷機や機械植字に関する図書のコレクション (Southward Collection) もあった<sup>28)</sup>。

この時期、セントブライド図書館は、印刷に関する資料収集ばかりでなく、活字形態の実例を示

すための展示会の開催や<sup>29)</sup>、寄付金により購入された図書の目録を刊行するなど、活動範囲も拡大していた。1897年には、印刷を主題とする近現代の図書収集のために寄付された資金（Passmore Edward 基金）で購入された2,000点の図書が、館員のラング（F. W. T. Lange）等によって整理され目録として刊行された。また、1899年には、同スタッフによってブレイズ・コレクション目録が刊行された<sup>30)</sup>。それらは、分析書誌学の研究者仲間にも送られた。セントブライド図書館には、1900年にプロクターが書いたラング宛てのはがきが残されている。プロクターのはがきには、目録送付に対するラングへの感謝の意と同時に、刊行したばかりの自分の小冊子をセントブライド図書館に送る旨が記されている<sup>31)</sup>。セントブライド図書館が、インクナブラ研究を核とする分析書誌学研究者間のコミュニケーションにおいて、主要な存在の一つとして機能していたことが窺える。

プロクターは、1900年1月にダフと共に活字ファクシミリ学会（Type Facsimile Society）を設立した。15世紀の印刷本に用いられた活字をファクシミリ化して、初期印刷の方法や実際などを研究することを目的とするものであった<sup>32)</sup>。設立時の会員としては、書誌学者や図書館員などの個人会員のほか、ケンブリッジ大学図書館、英国書誌学会、大英博物館、セントブライド財団インスティテュート、オックスフォード大学ボドレイ図書館、フランス国立図書館、ライプチヒのドイツ書籍商組合図書館（現ドイツ国立図書館ライプチヒ館）、マンチェスター大学ジョンライランズ図書館などの機関が加わった。プロクターの記録には、1月16日にセントブライド財団が会に加入し、ちょうど会員数が50に達して、会として好スタートになったと記されている<sup>33)</sup>。

プロクターとブラッドショーとの交流関係を示すものは残されていないと同様に、ブレイズとの直接的な交流を示す文献もまた残されてはいない。プロクターは年齢的に見てブラッドショーやブレイズの次の世代に属しており、直接交流の機会はなかったものと考えられる。しかし、彼らの研究の目的や方向性はプロクターによって継承されていた。プロクターは、私生活では大の社交嫌いで、人との共同作業が苦手であったといわれるが<sup>34)</sup>、初期印刷史に関心を持ち活字研究を追求するなかで見せる彼の行動には、そのような消極性が少しも感じられない。彼は、大英博物館図書館員になると同時に英国書誌学会の会員となり、やがて会合にも頻繁に出席するようになった。そして、複数の著作を学会出版物として刊行したり、学会紀要の索引作成を一手に引き受けるなど、学会活動も積極的に行っている。

プロクターは1903年34歳の若さで世を去ったが、彼の死後、英国書誌学会年報では彼の業績と会への貢献について記し「プロクターは、1886年のブラッドショーの死以降、わが国の初期印刷史の研究を支えた最も偉大な人物であり、英国書誌学会は、この分野において彼にとって代われるほどの学識と才能をもった後任を、すぐさま見つけることはできない」<sup>35)</sup>と述べた。

## おわりに

19世紀後半から20世紀初頭にかけて起こった分析書誌学の研究は多くの目覚ましい成果を残した。しかし、それらの業績はそれぞれ個別に積み上げられたものではなく、興味と関心を同じくする人々のアイデアと、それぞれの研究が積み重なり広がっていったことの結果である。分析書誌学という新しい学問の誕生と発展の裏には、研究者のみならず書籍商、古書業者、図書館員といった異なる分野や職業をもつ人々の密なる交流があった。書物の物理的な形態、特に活字の形状等を分析するというきわめて現実的で実証的な研究の成果は、書物の出所を明確にただけではなく、それまで不明瞭であった15世紀後半のヨーロッパにおける印刷術伝播の歴史をも解明してくれた。ブレイズ、ブラッドショー、プロクターを柱として継承され発展していった分析書誌学は、次世代の人々にも受け継がれさらなる発展を遂げて行く。

例えば、プロクターの同僚であり大英博物館のインクナブラ目録編纂を共に手がけたボラードは、グレッグ (Walter W. Greg, 1875-1959)、マッケロー (Ronald B. McKerrow, 1872-1940) らとともに、英国書誌学会の中心として活躍し、分析書誌学を「新書誌学」と呼ばれる学問分野として確立していった。彼らは、研究の対象をインクナブラから近現代の書物へと拡大し、その影響は各国へも広がった。また、セントブライド図書館のペディーは、プロクターの印刷史的分類法を取り入れて独自の資料組織法を考案し、自館の図書館システムに応用していった。さらに、アメリカでは、バター (Pierce Butler, 1884-1953) がニューベリー図書館のインクナブラ・コレクション構築にあたって、プロクター索引とその分類手法を手本とし、印刷術の伝播と普及の実際を具現化してみせた。

そうした研究や実践を支え発展させていった原動力は、やはり彼らの学術的な交流であったと思われる。近年の研究が個別的で微細的なものへと傾斜していくなかで、研究と現場、研究と一般社会の乖離が危惧されはじめ、今また、研究に学際性とグローバル性が求められるようになってきた。分析書誌学の分野において、彼らが残した学術的コミュニケーションの実際は、今日の研究者たちに一つのモデルを示すものではないだろうか。

(本研究は、平成18年度-20年度日本学術振興会科学研究費補助金交付研究「分析書誌学の萌芽と発展に関する実証的研究—研究者間学術コミュニケーションを通して」の一部です。)

## 注・引用文献

- 1) Stokes, Roy. *Esdaile's Manual of Bibliography*. 4.ed. London, Allen & Unwin, 1967, 336p. (ストークス著, 高野彰訳『西洋の書物』雄松堂書店, 1972, 439p. 引用は p. 17)
- 2) 山下浩『本文の生態学』日本エディターズスクール出版部, 1993, 168p.

- 3) インクナブラの3分の1にはそれらの表記がないと言われる。前掲1), p. 393.
- 4) Hellinga, Lotte. *Caxton in Focus: the Beginning of Printing in England*. London, The British Library, 1982, 109p. (ヘリングガ著, 高宮利行訳『キャクストン印刷の謎: イングランド印刷学事始め』雄松堂, 1991. 158p.)
- 5) Blades, William, *The Enemies of Books*. London, Elliot Stock, 1896, 151p. (ブレイズ著, 高橋勇訳『書物の敵』八坂書房, 2004, 221p. 引用は p. 182)
- 6) 前掲4), p. 37
- 7) 前掲5), p. 183.
- 8) ブレイズは, キャクストンがイギリスで最初に印刷本を出したのは1477年と推定したが, その後の調査で, 1476年にキャクストンがウエストミンスターで免罪符を印刷していたことが判明した。そのため500周年記念祝祭は, 1976年に開催された。
- 9) 前掲5) 参照。1979年初出, 1880年初版 (London, Truebner, 110p.) , 1888改訂増補新版 (London, Elliot Stock, 165p.)
- 10) 前掲5), p. 108.
- 11) 詳しくは, 若松昭子「イギリスにおける分析書誌学の草創と発展—セントプライド印刷図書館を中心として—」『図書館情報学の再構築』勉誠出版, 2001, p. 168-179.
- 12) Berry, W. Turner. *The St. Bride Typographical Library: with Special Reference to Books on the Practical Side of Printing and Type Specimen Books*. London, The British Typographers' Guild, 1932. 22p. 引用は p. 5
- 13) Ibid, p. 5
- 14) St. Bride Technical Library や St. Bride Typographical Library と呼ばれた。
- 15) 前掲4), p. 36.
- 16) 前掲5), p. 183-184.
- 17) Bradshaw, Henry. "A classified index of the fifteenth century books in the De Meyer Collection sold at Ghent, November 1869." *Collected Papers of Henry Bradshaw*. Cambridge, 1889, p.206-236.
- 18) Stokes, Roy. "Bibliography." In *Encyclopedia of Library and Information Science*. New York, Marcel Dekker, 1976. Vol. 2. 引用は p. 412.
- 19) *Henry Bradshaw's Correspondence on Incunabula with J.W. Holtrop and M.F.A.G. Campbell*. Ed by Wytze and Lotte Hellinga. Amsterdam, Herzberger, 1966. 2v.
- 20) Needham, Paul. *The Bradshaw Method: Henry Bradshaw's contribution to bibliography*. Chapel Hill, Hanes Foundation, 1988. 33p. 引用は p. 8.
- 21) Gaslee, Stephen. "The study of incunabula in England since the death of Robert Proctor." *Guntenberg Festshirift*. p. 62-65
- 22) Johnson, Barry C. *Lost in the Alps: a Portrait of Robert Proctor, the "Great Bibliographer" and of his Career in the British Museum*. London, 1985, 49p. 引用は p. 12
- 23) *Tracts on Early Printing*. London, Privately Printed, 1985-1987. これは私的な配布目的で50部程度しか印刷されなかった。プロクターは年刊での出版を考えていたようだが, 大英図書館で確認できたのは3巻までである。
- 24) 前掲23), Vol. 1, 1985, p. [7]
- 25) Proctor, Robert. *An Index to the Early Printed Books in the British Museum: from the Invention of Printing to the Year 1500 with Notes of those in the Bodleian Library*. London, Kegan Paul, 1898-99, Vol. 1, p. 29.
- 26) ibid, p. 221-267
- 27) 前掲1)
- 28) *The British Printer*. Vol. 15, No. 237, 1927, p.143-144.
- 29) *British Colonial: Printer and Stationer*. No. 22, Nov. 30, 1916, p.1-2.

- 30) Peddie, R. A. *The St. Bride Typographical Library: its Method and Classification*. Aberdeen, The University Press, 1916, 24p. 引用は p. 1
- 31) 1999年3月8日, St Bride Printing Library にて閲覧。
- 32) *The Publications of the Type Facsimile Society*. Oxford, University Press, 1900-03. 会報として配布された *First List of Members. February, 1900*. 中の次の部分に記述が見られる。‘Facsimiles of the Types of the Early Printers.’
- 33) 前掲22), p. 34.
- 34) 松井竜吾, 小山騰, 牧田健史『達人たちの大英博物館』講談社, 1996, 308p. 引用は p. 77.
- 35) 前掲22), p. 33.